説教要旨『最も小さい者の一人』

マタイによる福音書　２５章３１～４６節

　イエスは、羊飼いが羊と山羊とを別々の囲いに入れたように、来たるべき時には、すべての国の民も祝福を受ける者と厳しい裁きを受ける者とにより分けられていくのだと話されています。そして、その様にしてより分けられるのは、「飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」という、苦しみの境遇に立たされたイエスに対して具体的な愛を示すか否かが基準となっているようです。そしてそのイエスに対する愛については、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」でもあると語られます。

　この箇所を読んだマタイ福音書時代の教会の人々にとって、先ず頭をよぎったのは、自分達の傍に立つイエスの姿であったかと思います。初期教会の人々は、周囲からの迫害のなかで貧しくされ、施しを受けながら飢え乾きをしのぎ、牢に入れられることも度々ありました。イエスの言う「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人」とは、そのまま自分達の境遇に当てはまったのです。また、実際に、イエスは自分に従って神の御心を行おうとする者を「兄弟」（12:50）と呼び、「わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」（10:42）と語っています。すると、初期教会の人々が感じたのは、自分達を「わたしの兄弟」と呼び、自分達への愛を我がことのように喜び、自分達を迫害する者に対して「永遠の火に入れ」と言うほどに怒って下さる主イエスの姿であったかもしれません。見方を変えれば、この弟子達をどう受け止めるかが、私達の救いと深く関わっていることが示唆されているようにも思えます。

　イエスが「わたしの兄弟」と呼ぶ弟子達は、やがてイエスを裏切り、自分達の弱さを痛み知っていく者達であることを聖書は明らかにしていきます。パウロの言葉を借りれば、彼らは十字架の出来事から、「善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっている」（ローマ 7:21）という人間の弱さを、嫌と言うほど痛み知っていくのです。しかし、その自分達の弱さを噛みしめるところから、そんな自分達を受け止めてくださる主イエスから、彼らは初めて本当の愛とは何であるのかを受け取り直し、語り直し、生き直していったのでした。そのようなすべてのことを見据えた上で、彼らを「わたしの兄弟」と呼ぶ主イエスに、私達自身の救いをも見出すよう聖書は問いかけているように感じます。

（文責：望月達朗牧師）